イザヤ書56－57章「選り分けられる義人と悪者」

1A 義への待望 56

1B 義を行う人々 1－8

2B 獣のように生きる人々 9－12

2A 地を受け継ぐ人々 57

1B 残された滅びゆく人々 1－13a

1C 取り去られる義人 1－2

2C 忌まわしい慣わし 3－10

2B 砕かれ、へりくだる人々 13b－21

1C 癒しと慰め 13b－18

2C 平安の約束 19－21

本文

私たちのイザヤ書の学びは、前回、55 章まで来ました。ついに今晩、57 章まで読み、そこでイザヤ書後半の、大きな区切り、二つ目の部分を読み終えます。49 章から始まった、主のしもべたるメシアの働きと受難、それにともなう、エルサレムに対する慰めが書かれていました。そして前回、54-55 章においては、この恵みに対して、主に立ち帰りなさいと呼びかけている言葉がありました。そして最後、それに応答して、義を待ち望む人々と、罪の中に留まり滅ぼされる人々に対する警告を伝えておられます。

1A 義への待望 56

1B 義を行う人々 1－8

1 主はこう言われる。「公正を守り、正義を行え。わたしの救いが来るのは近いからだ。わたしの義が現れるのも。」

主の恵みに応答し、その救いの中に生きる人々は、必ず、義に飢え渇きます。「ピリ 3:9 キリストにある者と認められるようになるためです。私は律法による自分の義ではなく、キリストを信じることによる義、すなわち、信仰に基づいて神から与えられる義を持つのです。」主が戻ってこられ、そこで義とされるのですが、それまでの間、信仰によって生き、この方が来られることを熱心に待ち望むのです。

そこで、その待っている時に、キリストの義を身につけることになります。ロマ 13 章 11-14 節までを読みます。「13:11-14 さらにあなたがたは、今がどのような時であるか知っています。あなたがたが眠りからさめるべき時刻が、もう来ているのです。私たちが信じたときよりも、今は救いがも

っと私たちに近づいているのですから。12 夜は深まり、昼は近づいて来ました。ですから私たちは、闇のわざを脱ぎ捨て、光の武具を身に着けようではありませんか。13 遊興や泥酔、淫乱や好色、争いやねたみの生活ではなく、昼らしい、品位のある生き方をしようではありませんか。14 主イエス・キリストを着なさい。欲望を満たそうと、肉に心を用いてはいけません。」

そして、良いわざに富むことになります。「エペ 2:10 実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。」先週の日曜、テトス書を学びましたが、そこにも、良いわざに熱心な民として選ばれていることを書いていました。「テトス 2:13-14 祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるイエス・キリストの、栄光ある現れを待ち望むように教えています。キリストは、私たちをすべての不法から贖い出し、良いわざに熱心な選びの民をご自分のものとしてきよめるため、私たちのためにご自分を献げられたのです。」

2 幸いなことよ。安息日を守って、これを汚さず、どんな悪事からもその手を守る人は。このように行う人、このことを堅く保つ人の子は。

義を行なうことについて、その一例として安息日を守ることを主は言われています。なぜか？ユダがバビロンに捕え移されるその理由の一つが、安息を守っていなかったことがあるからです。レビ記に土地の安息についての教えが書かれています。七年に一度、土地を一年休ませなさいという命令です（25:2-4 参照）。ところが彼らは土地を休ませませんでした。彼らがバビロンに捕えられていた 70 年間、土地は安息を得ることが出来たと、歴代誌第二の最後に書かれています。

安息日とは何か？それは主が六日で創造の働きを終わらせ、七日目に休まれたことを覚える日です。。主を覚えるために、自分たちも今行なっていることを一時やめて、主ご自身の前に出ていきます。今、私たちは、いわゆる、モーセの律法の中にある安息日にしてはいけないこと、そうした戒めを守る必要はありません。しかし、キリストご自身が安息日の本体であり、この方を覚えることが命じられています（コロサイ 3:16-17）。主を覚えるために立ち止まるということ、キリストがなされた業を覚えて、いつも行なっていることを止めるということ、この原則は今も変わっていません。主を覚えるからこそ、他の悪事に手を出さないでいることができます。

3 主に連なる異国の民は言ってはならない。「主はきっと、私をその民から切り離される」と。宦官も言ってはならない。「ああ、私は枯れ木だ」と。

主は、これまで、ご自身の名で祈り、礼拝を献げることのできないとされていた者たちに対して語りかけておられます。申命記 23 章 1 節によると、去勢をしている者や異邦人が主の集会に加わってはならないという命令があります。エルサレムの礼拝のところまで行くのですが、外庭は誰で

も入ることができますが、異邦人に対して、「そこから中に入るには死も覚悟しなければいけない」但し書きの表札がありました。そして宦官については、使徒の働きでエチオピアの宦官のことを思い出します。彼はエルサレムに巡礼に行ってきたのですが、その中にまで入って礼拝した訳ではなかったのでしょう。疎外されていました。そして、「ああ、私は枯れ木だ」というのは、もちろん、子を生むことができないことを話しています。

4 なぜなら、主がこう言われるからだ。「わたしの安息日を守り、わたしの喜ぶことを選び、わたしの
契約を堅く保つ宦官たちには、5 わたしの家、わたしの城壁の内で、息子、娘にもまさる記念の名
を与え、絶えることのない永遠の名を与える。

主の家の中に入ることが終わりの日にはできるようになる。そして、それは子を生むことよりもはるかにすぐれた祝福なのだ、ということです。すばらしいですね、これがキリストの福音がしてくれたことです。どんなに障害があろうとも、社会的に疎外されているようであっても、人生に負い目を持っていたとしても、主の恵みはそのような負い目を持っていない人以上の祝福と栄誉を、礼拝をする者に与えられるということです。

6また、主に連なって主に仕え、主の名を愛して、そのしもべとなった異国の民が、みな安息日を守
ってこれを汚さず、わたしの契約を堅く保つなら、7 わたしの聖なる山に来させて、わたしの祈りの
家で彼らを楽しませる。彼らの全焼のささげ物やいけにえは、わたしの祭壇の上で受け入れられ
る。 なぜならわたしの家は、あらゆる民の祈りの家と呼ばれるからだ。

異国の民も同じように、終わりの日には、「異邦人の庭」というものは存在せず、中に入って共にいけにえを献げることができるのだということです。このように主は、隔ての壁を取り除いてくださいます。「エペ 2:14 実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し」ちなみにイエス様は、宮清めをされた時に、この箇所を引用し、神殿は祈りの家でなければいけないと言われました。

8――イスラエルの散らされた者たちを集める方、神である主のことば―― すでに集められた者たち
に、わたしはさらに集めて加える。」

8 節ですが、そこにはエルサレムに集められるのが、イスラエルの民のみならず、さらに異邦人を集めるとあります。このように、心で神を信じている者は、彼が異邦人であってもその信仰によって清めてくださるという恵みがあるのです。

覚えていますか、パウロがエルサレムに戻った時に、清めの儀式をする人を連れて、共に神殿に入りましたが、その人がエペソからの異邦人だと思った人が、騒動を起こしました。そして、パウ

ロは、ローマの千人隊長によって引き出されましたが、そこでヘブル語で、主イエスに出会った証しをしたのです。しかし、自分を異邦人に遣わすというイエスの言葉を語った瞬間に、こうなります。「使 22:22 人々は彼の話をここまで聞いていたが、声を張り上げて言った。「こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしておくべきではない。」」このような、隔ての壁が、人々の心から崩れ去る、ということです。

2B 獣のように生きる人々 9－12

9 野のすべての獣よ。やって来て貪り食うがよい。林の中のすべての獣も。10 神の見張り人は目が見えず、みな何も知らない。彼らはみな口のきけない犬、ほえることもできない。あえいで、横になり、眠りを貪る。

主の義を身にまとい、主の救いが来るのを待っている人々がいます。それは、宦官でも、異国の民でも、差別はありません。その一方で、たとえ、イスラエルの民であっても、犬のように生きている者たちがいて、神の裁きにはえこひいきがないことを教えています。覚えていますか、パウロが、恵みの福音を伝えているのに、律法の行いよらなければ救われないとして、異邦人に割礼を強いるような人々がいました。彼らのことを、パウロが「犬」と呼んだことがあります。「ピリ 3:2-3 犬どもに気をつけなさい。悪い働き人たちに気をつけなさい。肉体だけの割礼の者に気をつけなさい。神の御霊によって礼拝し、キリスト・イエスを誇り、肉に頼らない私たちこそ、割礼の者なのです。」

11 この犬どもは貪欲で、足ることを知らない。彼らは牧者なのに、悟ることがない。だれもがみな、自分勝手な道に向かって行く。 一人残らず、自分の利得に。12「やって来い。ぶどう酒を持って来るから、強い酒を浴びるほど飲もう。明日も今日と同じだろう。 もっと、すばらしいかもしれない。」

牧者とありますから、彼らはイスラエルの指導者でした。それが自分の利得だけ求めていました。それにもかかわらず、日々、お酒に浸っています。「明日も今日と同じだろう。」という人生観、生活感は危険です。聖書は、突如としての滅びが来ると教えています。だから、いつ何時、主が来られても、用意しているようにしなさいということを教えています。パウロは、死者の復活はないと言っている者たちがコリントの教会にいることを知って、こう語っています。「Ⅰコリ 15:32-34 もし私が人間の考えからエペソで獣と戦ったのなら、何の得があったでしょう。もし死者がよみがえらないのなら、「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ、明日は死ぬのだから」ということになります。33 惑わされてはいけません。「悪い交際は良い習慣を損なう」のです。34 目を覚まして正しい生活を送り、罪を犯さないようにしなさい。神について無知な人たちがいます。私はあなたがたを恥じ入らせるために言っているのです。」

2A 地を受け継ぐ人々 57

こうして、世に酩酊、その他の思い煩いや罪があり、その中に埋没する危険があります。そこで、

主は、義人を途中で取り去ることを行われます。

1B　残された滅びゆく人々　1－13a

1C　取り去られる義人　1－2

1「義人は滅びるが、心に留める者はいない。誠実な人は取り去られるが、気づく者はいない。 義人は、わざわいを前にして取り去られる。2 その人は平安に入り、まっすぐに歩む人は、自分の寝床で休むことができる。

義人が取り去られる時が来ます。主が、ご自分が来られるのはノアの日のようだ、と言われました。「マタ 24:38-41 洪水前の日々にはノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていました。39 洪水が来て、すべての人をさらってしまうまで、彼らには分かりませんでした。人の子の到来もそのように実現するのです。40 そのとき、男が二人畑にいると一人は取られ、一人は残されます。41 女が二人臼をひいていると一人は取られ、一人は残されます。」聖書には、義人が死ぬ、あるいは生きている時にそのまま天に移されることも啓示しています。神とともに歩んでいたエノク、そして火の戦車によってエリヤは天に昇りました。

そして終わりの日に、キリスト者らはラッパの音と天使の号令の下に一気に空中に引き上げられます。「Ｉテサ 4:16-17 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」そして、ここ２節に書いてあるとおり、取り去られた人たちは、天において平安に入ることができます。安息を得ることができます。

2C　忌まわしい慣わし　3－10

ところで、義人が取り去られることで、取り残された人が悔い改めて主に立ち帰る、ということでは必ずしもありません。義というのは、どんなにそれが貴いものでも、イエスご自身が言われたように、「豚に真珠」なのです。気に留めません。けれども、義人たちがいなくなったほうが、幸せであります。次から、全く悔い改めることのない者たちの姿が出てきます。

3 しかし、あなたがた、女ト者の子ら、姦夫と遊女の子孫よ。ここに近寄れ。4 あなたがたは、だれをからかい、だれに向かって口を大きく開き、舌を出すのか。あなたがたは背きの子、偽りの末裔ではないか。

この「姦夫と遊女の子孫」というのは、一義的に、霊的なことです。「女ト者の子ら」とありますね。偶像礼拝をしている者たち、ということです。まことの神ではない、偽りのものと交わっているということで、姦淫をしているとみなします。私たちは、異なる霊、神ではない霊と交流したところで、大き

な問題ではないと考えるかもしれません。しかし、それは霊的な姦淫であり、霊的に深刻な傷をもたらします。

5 あなたがたは、樫の木の間や、青々と茂るあらゆる木の下で、身を焦がし、谷や、岩の裂け目で
子どもを屠っているではないか。6 谷川の滑らかな石があなたの分、それら、それらこそが、あなた
の受ける割り当て。それらに、あなたは注ぎのぶどう酒を注ぎ、穀物のささげ物を献げているが、
こんな物で、わたしが慰められるだろうか。

イスラエルの民が行なっていたのは、ヨシュアたちが約束の地に入る前にカナン人たちが行なっていた忌まわしい慣わしのことです。まず、緑が生い茂っているところで偶像を据えて、いえにえを献げます。

7 そびえる高い山の上に、あなたは寝床を設け、そこにも上って行って、いけにえを献げた。8 あな
たは、扉と柱のうしろに、自分を記念する像を置いた。あなたはわたしを捨てて裸になり、そこに上
って自分の寝床を広げ、彼らと契りを結び、彼らの寝床を愛し、彼らの象徴物を見た。

その像の前で、肉体的にも忌まわしいことを行います。性的な行為、倒錯行為も行います。

9 あなたは油を携えて王のところまで旅し、香料を増し加え、使者たちを遠くまで送り出し、よみに
までも下らせた。10 あなたは、長い旅に疲れても、『あきらめた』とは言わなかった。あなたは元気
を回復し、それで弱らなかった。

遠く前で行って、そこの王たちにも貢物を持ってきました。そして、その国の偶像にもいけにえを献げるということまでしているのに、あきらめることはしなかったと言います。イスラエルの周りには、ペリシテ、モアブ、アンモン、アラムがいます。そこにある偶像にいけにえを献げに行ったのです。私たちも罪の生活をすると、そのために無駄にお金を使っても、それでもあきらめません。罪によって疲れ果てても、やめようとしないのです。

11 あなたは、だれにおじけ、だれを恐れて、まやかしを言うのか。あなたはわたしのことを思い出さ
ず、心にも留めなかった。わたしが久しく黙っていたので、わたしを恐れないのではないか。

偽りの神々には、おじけづき、恐れて、まやかしをいっています。それにもかかわらず、肝心のまことの神のことは思い出しません。心に留めません。

そして主は忍耐されています。久しく、黙っていたとありますが、それは忍耐されていたので、ご自身がおられない、何も関わらないということでは全くないのです。しかし、主が黙っておられるの

で、彼らは神を恐れなくなってしまったのです。

12 わたしは、あなたの義のわざと、あなたの行いの数々を告げよう。 しかし、それらはあなたにとって役には立たない。

彼らが正しいと思っている事があります。それを行っています。主はそれらをすべて、ご存知ですが、それは全く役に立たないと言われます。ちょうど、カインの供え物が信仰から出ていないので、主が受け入れられなかったのと同じです。

また、自分たちの義が不潔な着物のようだという箇所が出てきます。「64:6 私たちはみな、汚れた者のようになり、その義はみな、不潔な衣のようです。私たちはみな、木の葉のように枯れ、その咎は風のように私たちを吹き上げます。」自分たち自身から出た行いは、それが善意であっても、神からのもの、恵みによって信仰によって与えられたものでないかぎり、汚れているのです。

13a あなたが叫ぶとき、 あなたが集めたものどもに、あなたを救わせよ。風が、それらをみな運び去り、もやがそれらを連れ去ってしまう。

偶像をこれまで拝んできたのだから、それらにあなたを救わせよと言われます。わざわざ、外国から集めてきた神々ですから。けれども、それは運ぶ去ることができるものです。連れ去られてしまうものです。むなしいですね。同じようなことを、主イエスは、富について言われましたね。「マタ6:19 自分のために、地上に宝を蓄えるのはやめなさい。そこでは虫やさびで傷物になり、盗人が壁に穴を開けて盗みます。」

2B 砕かれ、へりくだる人々 13b－21

1C 癒しと慰め 13b－18

13b しかし、わたしに身を寄せる者は、地を受け継ぎ、わたしの聖なる山を所有することができる。

13 節のこの場所から、地を受け継ぐ人たちの話を主は語り始められます。「わたしに身を寄せる者」とあります。自分自身に誇りをもたらず、自分自身はどうしようもないと自覚し、それで主の憐れみにすがる人です。そうした人は、「地を受け継ぎ」ますね。主が、柔和な人が幸いで、そのような人が、地を受け継ぐと言われました。

そして、「わたしの聖なる山を所有」とありますが、それは、主が戻ってこられた後のエルサレムのことでしょう。

14——主は言われる—— 盛り上げよ。土を盛り上げて、道を整えよ。 わたしの民の道から、つまず

きを取り除け。」

イザヤ書の中に、離散のユダヤ人が大路を通ってエルサレムに歩いていく預言がありました（例:35:8-10）。そして今、その道を主が整えなさい、つまずきを取り除きなさいと呼んでおられます。そのつまずきとは、先に書いてある偶像礼拝であるとか、その他の悪事であります。

15 いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名が聖である方が、こう仰せられる。「わたしは、高く聖なる所に住み、砕かれた人、へりくだった人とともに住む。へりくだった人たちの霊を生かし、砕かれた人たちの心を生かすためである。

ここに、これまで読んできた、主の恵みの働きに対する私たちのあるべき態度が書いてあります。高く聖なる所に主が住まわれますが、そこに入るのは、自分の正しさを積み上げた者ではなく、「砕かれて、へりくだった人」です。これまでどんな悪を行なったとしても、へりくだって、その罪を言い表し、悔い改める人は、主はその全ての悪から清めてくださいます。

「へりくだり」が必要なのです。自分の行ないを清めてから主の前に行こうとするとき、そこにはまだ、主の前にへりくだっているのではありません。そのまま心砕かれることによって、主が初めて住んでくださいます。パリサイ派の人と、取税人がそれぞれ神殿で祈りましたね。パリサイ人は自分のした正しいことを神に伝えていました。けれども、取税人は違いました。「ルカ 18:13 一方、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神様、罪人の私をあわれんでください。』」彼こそが、義と認められたのです。

16 わたしは、永遠に争うことはなく、いつまでも怒ってはいない。わたしから出た霊が衰え果てるからだ。わたしが造ったいのちの息が。

とても興味深い表現です。主が、御怒りを示すその息が衰え果てました。つまり、言い換えれば、ずっと怒っているわけではないということです。主は正しい方で、正しい御怒りを持っておられますが、憐れみのほうがまさっているのです。「ヤコ2:13 あわれみがさばきに対して勝ち誇るのです。」

17 彼の不正な利得の咎のために、わたしは怒った。 わたしは顔を隠して彼を打ち、そして怒った。しかし彼はなお背いて、自分の思う道を行った。18 彼の道を見たが、それでもわたしは彼を癒やす。わたしは彼を導いて、彼とその嘆き悲しむ者たちに、慰めを報いる。

この者は、ずっと神に背き、最後まで自分の思う道を行っていました。けれども、最後の最後に、嘆き悲しんでいます。その者たちに、癒しを与えて、慰めを与えると言われています。ちょうどこれは、五時から働き始める日雇い労働者に対する、主人の気前良さに似ています。「マタ 20:6-9 ま

た、五時ごろ出て行き、別の人たちが立っているのを見つけた。そこで、彼らに言った。『なぜ一日中何もしないでここに立っているのですか。』彼らは言った。『だれも雇ってくれないからです。』主人は言った。『あなたがたもぶどう園に行きなさい。』夕方になったので、ぶどう園の主人は監督に言った。『労働者たちを呼んで、最後に来た者たちから始めて、最初に来た者たちにまで賃金を払ってやりなさい。』そこで、五時ごろに雇われた者たちが来て、それぞれ一デナリずつ受け取った。」

主は、最後に悔い改める者たちに先に、賃金を支払う主人のような方です。

2C　平安の約束　19－21

19 わたしは唇の実を創造する者。平安あれ。遠くの者にも近くの者にも平安あれ。わたしは彼を癒
やす。 ――主は言われる――

主は、平安を語られ、平安の実を結ばれます。それは、近くにいる者も、遠くにいる者も、等しく、ただで与えられる恵みです。へりくだる者には、すぐに平安が与えられます。

20 しかし、悪しき者は荒れ狂う海のようだ。 まことに、それは鎮まることができず、 その水は海草
と泥を吐き出す。21 悪しき者には平安がない。 ――私の神はそう仰せられる。」

これまで、49 章から学びで、主がどれほどご自身を献げて、私たちを贖い出そうとされているかを見ることができました。へりくだって、その恵みを受け取れば平安がですが、そうではなく拒むのであれば、ここに書かれているように、荒れ狂う海のようになります。悪しき者には平安がないのです。私たちの心は、平安を望んでいます。それは主から来るものです。自分の罪を悔い改めて、憐れみに満ちた方を受け入れることによってきます。